



「マダガスカル」の発展に今後も建設工事を通じて積極的に貢献していく」

昨年8月29日、横浜市で開催されたアフリカ開発会議に出席するため来日したマダガスカルのラジヨエリナ大統領からインフラ整備への協力を求められると、大豊建設の大隅健一社長はこう答えた。

昭和52年着工のナモロナ水力発電所建設以来、同国のインフラ整備に貢献。これが認められて平成21年完成のエホアラ港は同国の高額紙幣の絵柄に採用され、国家勲章も2度授与された。こうした熱い関係は、大豊が昭和24年の創立以来培ってきた技術力もたらしたといえ、モットーの「信頼に応える確かな技術」は今や日本を飛び出し、世界で求められつつある。

「建設業界では『営業が一番』と言われがちだが、大豊は、技術力がないと営業できないという発想になっている」。中杉正伸副社長はこう言い切る。

技術への自信の表れで、70年前の創立宣言に書かれていた。「営業性・政治性を過



マダガスカル大統領(右)と大隅社長(左)会談

信せず、誠実と努力と技術力とを以て他を圧倒する」。創業者の内田弘四氏と加悦宇八氏が唱えた精神は受け継がれ、技術をベースにした営業の展開に加え、優秀な技術は

同時に進歩する技術でなければならぬという「創造と開拓」に進化した。

地下に構造物を安全・確実に造るニューマチックケーソン工法、トンネルなどを掘る泥土加圧シールド工法はともに画期的技術として長く業界をけん引してきたが、技術集団としてのプライドがチャレンジャー精神をかき立て、今もなお最先端を走る。

技術開発の原点である現場の発見や創意工夫は全社員で共有。新技術などを紹介する技術フォーラムを年1回開催、その内容は冊子にまとめられ、技術力の平準化を促すとともに、難工事の施工事例を発表し改良点の水平展開に役立てている。

昨年10月の第24回フォーラムでは12件の報告があったが、選ばれた発表者はやりがいを感じ、聞く方は大きな刺激を受けるといふ。大隅社長は「今持っている技術を深化させ、技術をきちんと使いこなせる人材の育成がわれわれの責務」と話した。

技術力のない会社は淘汰される厳しい時代を迎える中、技術力向上に向けた切磋琢磨が続く限り、大豊の前途は明るい。